

17 世紀オランダ絵画に見る芸術と科学： 静物画に描かれた頭蓋骨の解剖学的アプローチによる図像分析

東京大学 総合文化研究科 博士後期課程 2 年（助成時）

同上 博士後期課程 3 年（現 在）

梶西 由記子

1. 要約

本研究は、17 世紀オランダの静物画においてヴァニタス（現世の儚さ）の象徴として頻りに描かれた頭蓋を解剖学的観点から観察し、その形態的特徴を抽出すると同時に、当時の社会における芸術・科学・宗教の複雑な関係性の一端を明らかにすることを目指した。本研究では特に、17 世紀オランダで活躍した静物画家エドワールト・コリールとその周辺の画家のヴァニタス画を対象に、画中に描かれた骨の形態を分析した。分析においては、解剖学や古病理学の知見を導入することで、年齢・性別・病気などの推測を試みた。さらに、骨の特徴的な形質を詳細に観察することで、それらを描いた画家の科学的関心や絵画制作上の意図の考察を行った。

2. 研究の目的

頭蓋は西洋絵画にしばしば描かれるモチーフであるが、美術史において頭蓋はこの世の虚しさや虚栄を意味する「ヴァニタス」の象徴として図像学的に解釈されてきた。しかし、形態学的知見から画中の骨の特徴を観察し、そこから得られた情報を作品分析に応用した研究はこれまでない。いくつかの作品における頭蓋は形態学的に見て極めて正確に描写されており、解剖学や古病理学の知見を導入することで、年齢・性別・病気など様々な情報の推測が可能である。本研究では具体的に以下 2 点を明らかにすることを目指した。

① 描かれた頭蓋の形態的特徴の整理

細部まで精密に描かれた骨を解剖学的知見から観察することで、年齢や性別の推定が可能になる。さらに、繰り返し描かれた特徴的な形質があることがわかり、画家が意図的に特定の形態的要素を選択していたと考えられることから、ヴァニタス画における解剖学と美術の関係性も明らかにすることができる。

② 近世オランダにおける芸術・科学・信仰の関係性の考察

17 世紀のオランダでは、芸術家と科学者の距離は近く、両者は協働して科学的知識の探究に携わった。さらに、事物を見えるままに描くことは創造主の理解につながるという論理で、オランダの公認宗教であるプロテスタントによっても正当化され、当時の絵画理論書においても積極的に推奨された。すなわち、17 世紀オランダ美術において、科学と信仰は矛盾することなく独特な形で両立し、芸術作品の制作は科学的探求であると同時に敬虔

な行いでもあったと考えられる。絵画に描かれた頭蓋の分析を通じて、現実の描写であると同時に寓意でもあるというオランダ静物画の二面性の背後にある、当時の社会における芸術・科学・信仰の複雑な関係性に迫る。

3. 研究実施項目とその内容：以下3つの段階を通じて、頭蓋の形態的特徴を分析した。

- ① 分析対象とする作品の選定（骨の描写が明瞭で分析可能な作品20点程度）
- ② 絵画における頭蓋の形態的特徴を抽出、性別・年齢・病歴の推定
- ③ 抽出した骨の形態的特徴を解剖学・病理学的観点から分析

4. 研究の成果

17世紀オランダを代表する静物画家であるエドワールト・コリールの複数の作品の頭蓋に、特徴的な形質が繰り返し描かれていることが観察されたため、コリールの作品を中心に据え、同時代の他の画家の作品や当時話題となったビドロの解剖学図譜との比較検討を行った。コリールの作品の中でも特に1663年制作の作品（図1）の頭蓋および大腿骨には、特徴的な隆起が観察されたため、本作品を中心に分析を行った。その結果、1663年の作品の頭



図1. エドワールト・コリール《ヴァニタス》1663年、国立西洋美術館

蓋は、縫合の閉鎖度や歯の形態から中年の女性のものである可能性が高いことがわかった。また、作中の頭蓋に観察された骨性腫瘍は、これと類似した外観の病変を報告する臨床研究や古病理学の先行研究との比較から、頭蓋と左大腿骨に発生した多発性骨腫である可能性が高いことが推察された。さらに、絵画に描かれた頭蓋の縫合線や長骨の骨端部を詳細に観察した結果、画家がヴァニタスという主題にふさわしい形態を持つ骨を選択した可能性が示された。コリールの描く頭蓋の額には、前頭縫合という骨間のつなぎ目がしばしば確認されるが、それは成人においてメトピズムと呼ばれる発現率約8.7%の非常に珍しい形質である。前頭縫合のある頭蓋は、頭頂部を縦に走行する矢状縫合およびそれらと直角方向に走行する冠状縫合とつながり十字形をなすことから、「十字頭蓋」と呼ばれる。このような特徴を持つ頭蓋を生涯に渡り繰り返し描いたことから、画家はキリストの磔刑を想起させる前頭縫合を持つ頭蓋を、ヴァニタス画にふさわしいモチーフとして選んだことが示唆された。本研究は、解剖学的分析によって、イコノロジー中心の従来の研究では見過ごされてきた、オランダ静物画の科学的側面に光を当て、新たな作品解釈の可能性を提示するとともに、オランダ黄金期における解剖学と芸術の興味深い協働関係の一端を明らかにした。